高山・市民の森 森林教室実施報告書

「 クリスマスリースづくり 」

令和５年 12 月 10 日

1 実施日時　令和５年 12 月10 日（日） 10:00～14:30

2 参加講師名　NPO 森林インストラクターしずおか

担当者　大石、中川

アシスト会員　越智、小久保、小嶋、小長井、佐野、高橋、早川、矢下

3 参加者　36 人（大人 24 人 、子ども 12 人）

4 概要

当初は、12 家族 44 人の参加が予定されていたが、2 家族がキャンセルとなり、10 家族 36 人の方が参加してくれた。1 家族（3 人）が道を間違えて遅れた為、4 班編成で散策をスタートし、その後遅れた家族を 5 班として散策してもらった。快晴で暖かい日であったことから、2才の子供から 70 代のお年寄りまで、皆さん頂上を目指してくれた。頂上では、富士山をはじめ素晴らしい景色を眺めることが出来た。

午後からは、沢山の種類の木の実、生木を机の上に並べて、構想を練りながらリースへの飾り付けをしてくれた。出来上がった作品は素晴らしいものであり、最後に作品を手に持ってもらいながら記念写真を撮った。皆さんには満足して帰っていただけたと思う。

5 内容

【森の散策】

第 1 班（小久保・高橋 担当）

ご夫婦2組と友人のグループ、いずれも 60～70 歳代の方々ばかり11人の班だった。これまでも森林教室に参加したことのある人や、高山をよく知っている人も多く、元気いっぱいのシニア世代を絵に描いたような方々だった。今日は天気も良いので、当然のように山頂まで登りたいと皆さんがおっしゃる。歩き始めると一部の人たちは元気よくズンズン先に行ってしまうので、「ガイドより先に歩くと、クマが出ても知りませんよ」と言わなければならないほどだった。「ちゃんと木の説明を聞いてもらうのも私達の仕事ですから」と言って、適宜立ち止まりながら山道を登った。例えばミツマタを見て「枝が 3 つに分かれていますね。さあ、この木は何でしょう？」と問うと、すかざず「ミツマタ？」という声。そこで、枝を折ってみることで紙幣としての用途に思いを巡らせてもらった。また、クロモジの枝の香りを嗅いだり、コバノガマズミの実を口に入れてみたり、定番の体験もしてもらいながら歩いた。

最初は皆さん元気そうだったが、さすがに山道の途中では列の後方で所々立ち止まる人も出てくるようになった。そこで樹木の説明にもたっぷり時間を使うことで、ゆっくり登るようにした。例えば、ヒノキの葉の形や気孔線、樹肌によるスギとヒノキの見分け方、ヒノキの樹皮の檜皮葺きへの利用などを話したが、こうした説明も「初めて聞いた」と興味深そうだった。こんな具合に途中でペースを落としたものの、それでも山頂には一番乗りで到着した。黄砂の影響か遠くが少し霞んではいたが、雲一つない好天で伊豆半島から静岡の市街、そして富士山まで見晴らすことができ、皆さん大喜びだった。口々に「ここでお昼にしたかった．．」などと言いつつ、スマホで互いのスナップを撮ったりしてしばしの時を楽しんだ。帰路は黙々と林道を下ったが、「楽だけど、何も見るものがなくてつまらないね」と、嬉しい一声。登りの時はやや疲れたものの、樹木の解説を聞きながら歩いたことを楽しく感じてくれたようだった。

（小久保、高橋 記）

第 2 班（小嶋・小長井　担当）

初参加の家族（祖母、母、女児（11 才）、男児（7 才））と参加 4 回目の家族（夫婦と女児（6才と4才））の計8名案内した。6才と4才の女児は前回、森の恵みから山頂まで歩いた実績があった。このため、中間展望台を経由、八十岡からのハイキングコースを使用して山頂まで行き、山道で下るコースとした。参加4回目の家族も八十岡からのハイキングコースは初めてだったようだ。ロングコースとなったが、脱落者が出ることもなく順調だった。子供たちは、山道を楽しんでいて、男児は実際に「楽しい」と言っていた。

森の恵みの近くにあるイロハカエデの翼果で、くるくる回りながら種子が飛ぶことを確認してもらいスタートした。その先のソヨゴの赤い実を見てもらった時に、6才の女児が「食べられる？」と質問してきた。前回、コバノガマズミの実を味わってもらったので、それを覚えていたかもしれない。その後、

・クロモジの枝の香りを嗅いでもらい、鹿はこの香が嫌いでたくさん残っていると思われること。
・切り株の年輪を見てもらい、形成層で細胞分裂して成長していること。
・落葉は土壌生物が分解してくれて土になり、養分が根から吸収され循環していること。
・紅葉の仕組みや針葉樹と広葉樹の違い。

などを説明した。大人の中には説明に興味を示すものもいたが、子供はクロモジの枝や、サンショウの葉の匂いを嗅ぐこと以外にはあまり興味を示さなかったようだった。　（小長井　記）

第 3 班（佐野・越智　担当）

3班は2組の家族7人を案内した。大人より子供の数が多かったので、子供向けの散策になるよう心掛けた。どうしても山頂に行きたいという男の子が2人いたので、参加者の意向も聞き高山の池経由で山頂まで行くことにした。早速実を付けたイロハモミジがあった。実はプロペラ型で回転しながら落ちることを、実際に体験してもらった。山頂まで行きたいという男の子たちは、ヘビの抜け殻やアリジゴク、バッタ、センチコガネ等、色々な場所から色々な生き物を探してくれた。どんな所にどんな生き物がいるか知っているようであった。人工林の中にミツマタがあったので、3 つに分かれている枝の特徴からミツマタの名前を憶えてもらった。ミヤマシキミの葉やクロモジの枝を折って匂いを嗅いでもらうと、「いい匂いがする」と好評であった。

管理道にでるまでは急坂なので、何度も休みながら登った。やっと管理道に出たので、ベンチに座って小休止。頂上につくと、富士山がはっきり見えた。市街地や海も見ることができた。ここでしばらく休息した後、森の中を抜けるコースを通って森の泉に戻ることにした。途中、ウラジロがあったので、特徴や正月飾りに使う理由を大人向けに解説した。子供達には、ウラジロシダのグライダー遊びを教えた。最初は上手く飛ばなかったが、コツを覚えると上手く飛ばせるようになった。歩きながら飛ばし、森の泉まで戻ってきた。予定をやや過ぎたが、他の班よりも早く到着することができた。今回は、元気のよい男の子たちが参加してくれたお陰で、賑やかな散策となった。この子たちは、体力のない小さい子にも気遣いをしてくれた。子供同士が仲良くなり、一緒に遊ぶ微笑ましい姿を目にすることもできた。また、子供たちの自然観察力、知識量に驚かされた散策であった。　（佐野　記）

第 4 班（矢下、早川　担当）

よく晴れて風もない穏やかな日だったので、2才の子供さんには、多少無理があるのは承知で参加者の了解を得たうえで、頂上まで登った。2才の子は、登りは大部分の道のりをお父さんに抱っこしてもらいながら頂上にたどり着いたが、下りは半分以上を歩いて下山した。ゆっくり下山したので、森の恵みには12時20分近くになってしまった。 富士山も雪をかぶった姿を現していて、静岡の街も全体的に良く見渡せた。頂上にも日が注いでいて、陽気に誘われてかバッタが出てきて、6才になる女の子が追いかけていた。少し寂しく感じたのは、例年この時期になると頂上にある樹木にイルミネーションの電球やら電線が張り巡らされているのに、今年は道路事情から中止になったことだった。参加者全員が眺めやらを楽しんだ。そして、2才の子はなかなか下ろうとはしなかった。

季節が冬ということもあり、花を見られなくて残念だった。それでもモチツツジが秋に出した葉に触れてもらって、そのネバネバ感を感じてもらったことで、虫を寄せ付けない戦略について説明出来た。また、クロモジの葉や小枝の匂いを感じてもらい、抗ウイルス作用があり、枝は箸や高級楊枝に利用していることも話した。それにミツマタの前では、枝が三又すなわち三つに分岐する特徴があることを見てもらい、名前の由来になっていることも説明した。和紙の原料だけではなく紙幣にも使われていることも知ってもらった。その他、植物を中心に説明した。（早川 記）

お客様は、小5の女の子とご両親、2才と4才の女の子とご両親の2組の若いご夫婦です。出発に先立って植物に親しんで頂くために、植物とは何ものなのかの説明から入った。 植物はそこに根を張れば生涯そこから移動出来ない。そのため身を守る為に色々な能力を持っている。花、枝、材のもつ夫々の香りの意味について次のように説明した。

・花の香りは自分の種を残すためのポリネーター（花粉を運んで受粉させる生物）を呼ぶ。
・枝・材の香りは微生物や害虫から自分自身を守る。
・葉は虫に齧られると、危険信号としての揮発性物質を発生し近辺の植物に危険が迫っている事を知らせている。

用意したヤブニッケイ・サンショ・ミズメの香りを嗅いでもらいながら、サンショの実の皮を少しだけ噛んでピリッとした味も感じてもらった。これは「粉山椒」や「七味唐辛子」の原料になり、胃酸分泌を促し消化を助ける事や、春の新芽、初夏の実の醤油漬け、山椒味噌等私達の身近に植物は存在していることを説明した。 次は近くにあるキハダに移動し黄色の内皮を少し削り、舌で軽く触れて貰った。小5の子どもさんも「私も頂戴」と興味を示してくた。キハダは江戸時代に修験者（山伏）が作った薬「陀羅尼助（百草丸）」の原料で、殺菌・下痢・二日酔い等に効果があることを話し、昔から人は薬としても植物と深い関わりを持ってきたことを説明した。

いよいよ山頂へ、途中高山の池を経由、ここではミズバショウの葉の少なくなった現状を見て貰い、動物の食害がここにもあるのを感じながら、急な山道を進んだ。林床刈り込みで地表から姿の消えてしまったミツマタが、新しく芽生えた枝の先に蕾をつけ、更に消えそうな蔓リンドウも、枝先に赤いルビーの様な実を結び子孫を残そうとしており、自然の再生の逞しさを感じた。山頂へ到着、富士山も綺麗に見えていたが、子供さん達の目は地面へ、バッタを追いかけて何回も逃げられながらもゲット、あっという間の時間を楽しんだ。

帰りの時間を気にしながら帰路につく。クロモジがあちこちにあるので薬効として、芳香成分には殺菌作用、枝葉はお茶や、煎じて胃腸薬として使われていた事を説明した。木には弾力があり油分も多いので、雪国ではカンジキの材料にもなっていたことも話させてもらった。途中で一休みしていると、白い綿をつけた様な虫が目の前に来て、すかさず小5の女の子が「あ！ 雪虫」と叫んだ。お母さんは「虫が苦手と言っていたのに」とビックリしていた。植物の名前・特徴の他に、人と植物の関わりを取り混ぜて話しながら散策したが、昔から私たちが使ってきた薬や食べ物が、身近な木から採取してきた事に驚きの様だった。
散会後、外で片付けている時、男の子と女の子が、「有り難う、楽しかった」と言って、駆けていったのを見て、今日の陽気と同じような爽やかな一日だった。（矢下 記）

第5班（大石 担当）

当初3班に入る予定の3人のご家族（おじいさん、おばあさん、男のお孫さん）は一年程前まで高山によく来ていたこともあり、勝手知った水見色からのコースで来ようとしたが、通行止めで遅れてしまった。この為、皆さんが出発した後に後発班としてスタートした。男の子は以前鹿の角を見たことから、角が落ちていないか探すのに夢中だった。天気も良く、頂上を目指して急坂を登りはじめた。スギ・ヒノキの林のなかで、枝や葉がたくさん落ちていた。ここでスギとヒノキの葉の違いについて説明させてもらうとともに、沢山のスギ・ヒノキが林立しているなかで、日のさす方向に枝が伸びているが、逆方向の日当たりの悪くなった

枝は自分で落ちしてしまう為、枝がなくなっているのを観察してもらった。

快晴の天気のもと、頂上での見晴らしは素晴らしかった。お孫さんの地理の学習にと、伊豆半島、駿河湾、日本平等説明させてもらった。せっかくだからと牛ケ峰まで足を延ばし、富士山・安倍奥の山々を見学した。気持ちの良い日よりでもあったことから、ここでお昼の弁当を食べたいなと残念がっていた。大半の木の葉は落ちていたが、落ちないということで、受験生に人気のある「ヤマコウバシ」の木には茶色に枯れた葉がたくさん残っていた。お孫さんを連れたおじいさん、おばあさんには参考までに、この縁起の良い木のお話をさせてもらった。 遅れたご家族も、無事午前の部の散策を終えて、「森の恵」に戻れた。

（大石 記）

【クリスマスリースづくり】

フジやアケビなどの蔓、それと稲わらを編んで輪にしたものを、リースのベースとして予め 45 ケ準備しておいた。材料や大きさなどは様々だったが、先に子供達、その後大人達と順番に好きなものを選んでもらった。参加者は 38 人だったので、各人に 1 ケは行き渡ることが出来た。それに飾りつける材料としては、各種マツボックリ（クロマツ、アカマツ、テーダーマツ、コウヨウザン、メタセコイア）、それにマテバシイ、コナラ、クヌギ、トチノキ、クルミなどの木の実を準備した。他にも生木の枝葉（多くは実のついたもの）だが、シナヒイラギ、センリョウ、クロガネモチ、ツルウメモドキ、イヌツゲ、クチナシ、サルトリイバラ、ガマズミ、ノイバラ、ヒサカキ、それにスギ、ヒノキ等も飾りつけ用に準備した。なお、散策時に材料を集めた参加者もいた。

ベースへの取付はグルーガンを使って溶着させるやり方と、針金で結える2通りの方法で行った。12 家族の参加者が予定されていた為、各家族に 1 台分のグルーガンを準備した。ペンチ・ニッパ類は会員の皆さんに持参してもらった。参加者はそれぞれ生木の枝葉、真っ赤な木の実、マツボックリ、ドングリ等を机の上に並べて、どう取り付けるか等の構想をめぐらせながら、作品作りを進めていた。傾向として、お年寄りのグループは常緑の枝葉を飾り、女の子はリボンを、子ども達はマツボックリ～ドングリを沢山使うようだった。皆さんそれぞれに創意に満ちた素晴らしい作品を作ることができ、最後にそれぞれの作品を手に記念写真を撮ってお開きにした。 (大石 記)

6 写真

【森の散策】

富士山がよく見えた

頂上目指して頑張る!!

【クリスマスリースづくり】

はじめに： 材料類と飾りつけの説明

リース･ベースの選定

マツボックリ･ドングリ選び

生木選び

リースの飾りつけ

リースの飾りつけ

リースの飾りつけ

リースの飾りつけ

作品

作品

作品

作品

作品を手に、記念写真

以上